

1 ラブストーリーの法則



ラブストーリーには障害が必要

ラブストーリーには共通のストーリー展開がある。最初からわかっているなんらかの客観的障害のために二人のあいだが引き裂かれることだ（「客観的」であることが重要）。それを克服できればハッピーエンドになるが、できなければ悲劇に終わる。

日本の恋愛小説には、このような障害がなく、うじうじした片想いの告白のようなものが多
い（片想いにおける障害は、客観的でなく、主観的である）。このため、ドラマチックな展開
にならず、全然おもしろくない。小説なら我慢して読めるが、映画では退屈だ。

先日亡くなったビリー・ワイルダー監督の「昼下りの情事」は、ラブストーリーの定石を忠
実になぞった筋書きである。ワイルダーは、「退屈なことは罪だ」と言った。それは言い過ぎ
と思うが（実際、タルコフスキの映画はすべて退屈だが、すべて感動的だ）、資本主義社会
において退屈な作品が商品になりえないのは、間違いない（タルコフスキは、ソ連の映画監
督）。したがって、私の法則によれば、必ず客観的な障害が設定されている。

より詳しく見ると、「障害」をいくつかの類型に分けることができる。第一は、社会的階級
だ。つまり、貧富差や身分差である。映画でも小説でも、ラブストーリーのかなりのものがこ
のジャンルに属する。たぶん、読者や観客が感情移入をしやすいからだろう。

「昼下りの情事」は、この障害を克服したハッピーエンドの典型例である。パリ娘アリアヌヌ
（オードリー・ヘップバーン）がアメリカの大富豪フラナガン（ゲーリー・クーパー）に恋を
し、最後はめでたく結ばれる。

ペローの童話『サンドリヨン（シンデレラ）』もこのカテゴリーである。その現代版が映画
「プリティ・ウーマン」だ。設定を逆にするとも「ローマの休日」になる。

悲劇の古典は、『ファウスト』（第一部）である。シュトルム『水に沈む』、ゴールズワージ
ー『林檎の樹』、シーガル『ラブ・ストーリー』など、文学作品ではこのカテゴリーの悲恋物

語が数多い。ただし、映画では観客がハッピーエンドを求めるので、悲劇はあまり多くない。小説ならストーリーが複雑でもフォロワーできるが、映画の場合はできるだけ単純な筋がよい。つまり、障害もできるだけわかりやすいものがよい。

ワイルダー監督の「麗しのサブリナ」は、「昼下り」とほとんど同じストーリーだが、あまり印象に残らない。それは、「昼下り」ほど単純な筋でないからだろう。後者のラストシーンはいつまでも覚えていられるのに対して、前者の結末はよく覚えていない。「プリティ・ウーマン」はおもしろいし感動的でもあるのだが、ジュリア・ロバーツとリチャード・ギアという同じ配役であるにもかかわらず、「プリティ・ブライド」はおもしろくない。二人の身分差が明確でなく、何が障害なのかがはっきりしないためだろう。

障害の第二類型は、両家のいさかみや親の反対だ。ハッピーエンドの代表がジョルジュ・サンドの『プチット・ファデット（愛の妖精）』であり、悲劇の古典がシェイクスピアの『ロミオとジュリエット』である。

第三は、戦争や革命だ。障害の巨大さからして、多くの場合、悲劇になる。ロマン・ロラン『ピエールとリュース』、パステルナーク『ドクトル・ジバゴ』などがその例だ。まったくのフィクションではないが、ツヴァイクの『マリリー・アントワネット』でも、フランス王妃マリリー・アントワネットとスウェーデンの騎士フェルセンの運命が、革命に翻弄される（もともと、身分差も大きいから、革命がなくてもハッピーエンドにはなりえないが）。

男性観客の根強い人気の理由

これまでは意識していなかったのだが、先日「昼下りの情事」を再見して、もう一つの重大な「障害」が設定されていることに気づいた。それは、「年齢差」である。

「君は若すぎるね」「あなたこそ歳をとりすぎている」というやり取りがあるから、この障害は、ワイルダーが意識的に強調する明確なメッセージだ。

それにもかかわらずこれまで強く意識していなかったのは、最初に見たとき私自身が若かったからだろう（撮影当時の年齢は、ヘップバーン二八歳、ワイルダー五一歳、そしてクーパー五六歳である）。

この映画がいまにいたるまで男性観客の根強い人気を博している理由は、間違いなくこの点にある。ミスター・フラナガンは、この年齢層の男性にとつて、希望の星なのである。五〇代前半までなら、「おれのほうが若い」という優越感に浸れるだろう（現実には、腹が出てきた等の厳粛な状況があったとしても）。

しかも、フラナガンは、センスがいいともみえない。オーケストラの演奏が始まってからオペラの会場に入ってくるし、すぐに飽きてしまつて、プロگرامを丸めて遠眼鏡。ホテルの部屋にバンドを呼び入れて「効果的」などといっている俗っぽさには、げんなりしてしまう。

いやいや、そうではない。これこそが、（男性の）観客を勇気づける基本的要因なのだ。なぜなら、「これならおれにもできる」と思ってしまうからである。フラナガンが大金持ちであることなどは、すっかり忘れてしまつて。

実際、リッツに数日泊まるだけなら、われわれでもできる。部屋にバンドを呼ぶのも、少し無理すればできる。フラナガンがやっていることで、われわれにできないことはないのだ。

「ローマの休日」では、こうはいかない。王女が口ずさんだ詩“Artheuso rose from a couch of snows in the Aquasaronian Mountains...”をめぐって、「キーツよ」「シェリーだろう」「いえ、キーツ」と押し問答する場面がある。残念ながら、われわれではこの論争に参加できない。この正解はシェリーなのだが、私がそれを知ったのは、映画を観てからずっと後だ。新聞記者ジョーと同じ立場にいたとしても、ただちに「シェリーだろう」とは反論できない。反論できなければ、その後のラブストーリーは展開しない。つまり、われわれが主人公では、「ローマの休日」は成立しえないのだ。

「プリティ・ウーマン」の主人公エドの本拠地はニューヨークだが、ロサンゼルスでもキャデラックのリムジンを乗り回している。そして、不良たちからまれたとき、運転手兼ボディガードが、隠し持っていた拳銃を見せる。なんともカッコイイ場面だが、残念なことに真似できない。それより何より、初めてのデートでオペラ観劇にゆくのに、家用機でサンフランシスコまで飛ぶ。ここまで差をつけられれば、何をか言わんや。あの映画は、シンデレラ願望の女の子向けのものではあっても、決して中年のオジサン向けのものではない。

最後まで残る恋愛物語の条件

ところで、社会が進歩すると、古典的恋愛物語のいくつかは、成立しなくなる。たとえば、

『ロミオとジュリエット』が悲劇になるのは、ジュリエットが僧ロレンスに託して送った手紙がロミオに届かなかったからだ。

しかし、いまなら携帯電話かメールで簡単に連絡がとれてしまう。こうした道具に慣れ親しんだ世代には、この古典劇の筋書きは理解できないだろう。

「進んだ」社会では、男女差の欠如さえ、結婚の障害にならなくなる。ワイルター監督のもう一つの傑作「お熱いのがお好き」では、女に化けたジュリーがプレイボーイの富豪オズグッドに求婚される。映画の最後で「おれは男だ」というダフネ（ジュリー）の告白に、オズグッドが「完全な人間などいなさ」(Well, nobody's perfect)と答える場面は、コメディ映画史上最高のシーンだ。

しかし、あと二〇年くらいすれば、同性同士の結婚もごく普通になり、この名台詞も生彩を失うだろう。シェイクスピア『十二夜』のおもしろさも半減する。

社会階級が消滅し、戦争や革命もなくなると、障害がさらに減少する。そういう世界では、私の法則によれば、恋愛ドラマの多くは成立しなくなってしまうのだ。

しかし、「年齢差」という障害は、いかに技術が進歩し、社会が平等化し、世界が平和になったとしても、残る——メフィストフェレスが現れてくれない限りは。

年齢差こそが未来社会で恋愛ドラマを成立させる基本条件になるはずだ。不況からの出口を求める出版業界や長期停滞をかこつ映画産業としては、これに注目しない手はない。これこそが、将来のエンターテインメント・ビジネスの中核である。

いや、とつくにそうなっているのかもしれない。実際、書店の店頭を見渡してみると、近ごろ創刊された雑誌の表紙には、端正な和服姿の若い女性の写真が目につく。特集記事は、「隠れ家レストラン」や「究極の豪華ホテル」など。つまりこれらは、団塊世代のミスター・フランガン予備軍をターゲットとした新ビジネスなのだ。

「ビジネス」と言っている意味は、説明の必要があるだろう。私は、「海外旅行は、実際に行かなくてもいい。写真や地図を見て行つたつもりになればよい」という「バーチャル旅行」を提唱しているのだが、昼下りの欲求も同じなのである。雑誌を読んで空想を広げたり、小説や映画の主人公に感情移入して錯覚に陥るだけでよいのだ。だから、団塊世代がフランガン年代になれば、彼らを対象とする雑誌や映画がビジネスになる。

ワイルダーは、半世紀も前にこれを見抜いていたのである。そして、アリアンヌに「若い男はおもしろくない。全然想像力がない (very unimaginative) から」と言わせている。なんたる慧眼！ そしてなんたるサーピス精神！

なお、読者諸賢には、「将来も残る障害がもう一つある」との指摘があるだろう（つまり、『アンナ・カレーニナ』的ラブストーリーは、今後もありうるということである）。これについて、ここではあえてコメントしない。

「昼下り」では、この点に関してカトリック諸国で起こりうる非難に対応するため、映画完成後にシユバリエ（アリアンヌの父親役）を呼び戻した。映画の最後にある「彼女はニューヨークで終身刑になるだろう」という説明は、このときに追加されたものだそうである。

それにしても、この映画の日本語タイトルは名訳だ。原題「Love in the Afternoon」を超えている。直訳で「午後の愛情」などとしたら、まるでサマにならない。昔の日本語タイトルは、映画に限らず、『若草物語』『巖窟王』『小公子』など、原題を超えるものが多かった。

最近の映画タイトルは、原題をカタカナにしただけで、しかも文法を無視している。「ロド・オブ・ザ・リング」には、がっかりした。日本で映画に人気が集まらない理由の一つは、タイトルに魅力がなくなっただろう。

02年4月20日号掲載

その後の展開

この原稿を書いたあとで「ローマの休日」を見て、「キーツ対シェリー」の場面はとても洒落れていることを改めて知った。

ジョーは、朦朧としている見知らぬ女の子に、「ベッドで寝るのでなく長椅子で寝ろよ」と厳命する（And you do your sleeping on the couch, see? — not on the bed, not on the chair: on the couch, is that clear?）。つまり、「couch」「couch」とわめきたてたわけだ。

アン王女はそれに直接答えず、「私の好きな詩を知って?」（Do you know my favorite poem?）と、「couch」が出てくるキーツの（本当はシェリーの）詩を口ずさんではぐらかした

のだ（なんで突然この詩が出てきたのか、これまではよく理解しないでいた）。

ただし、彼女が暗誦した文句は、少し間違っていた（王女のために弁明すれば、睡眠薬で頭がぼんやりしていたために）。

シェリーの *Arethusa* という詩は、つぎのように始まる。

Arethusa arose

From her couch of snows

In the Acroceranian mountains, —

From cloud and from crag,

With many a jag,

Shepherding her bright fountains.

（全文は <http://unix.cc.wmich.edu/~cooneys/poems/Duncan.Shelley.html> や <http://www.mcsdrexel.edu/~corres/Archimedes/Coins/Arethusa.html> にある）

映画の字幕では、*Arithuso* ではなく、*Arethusa* ではなく、「アリアドネ」となっていた。これは、とんでもない誤訳である（字幕翻訳者が苦労したであろうことは、よく理解できるのだが）。

どちらもギリシャ神話に出てくる名前だが、*Arethusa*（アレスーザ）は小川に変えられた森の妖精だ。だから、「雪のしとねから身を起し」ということになる。これは、小川が深い山から湧き出るさまだ。アリアドネは、ミノス王の娘で、アテナイから怪物ミノタウロスを退治に来た王子テセウスを助けたことで知られている。アリアドネでは、なんで *couch of*

Postscript

SNOWSなのか、まるでわからない。

なお、「年齢差こそラブストーリーを成立させる永遠の要因」という命題の正しさについて、本書の4「ロード・オブ・ザ・リング字幕騒動」〈その後の展開〉の最後を参照されたい。

『十二夜』は、シェイクスピア喜劇の最高傑作だ。主人公ヴァイオラは男装してシザリオとなっているために、オーシーノウ公爵に対する片想いを告白できない。同時に、オリヴィア姫がシザリオに寄せる想いも実現できない。そして、オーシーノウはオリヴィアに恋焦がれる。最後にヴァイオラの双子の兄セバスチャンが現れて、ドタバタ劇のあと、この行き違いが一举に解決される。

『十二夜』の何ともいえないおかしさの理由は、男女の取り違いだ（ついでに言うくと、シェイクスピアの時代には女性が舞台上上がることが許されておらず、声代わり前の少年が女性役を演じていた。だから、ヴァイオラ役は実は少年で、劇で女性になり、そして男装するということになる。相当头がこんがらがる状態だ。モーツァルトの「フィガロの結婚」で、ソプラノの女性が演じる小姓ケルビーノが戯れて女装する場面に似ている）。

「人違い」が喜劇の基本要素になることは、シェイクスピアのもう一つの喜劇『夏至の夜の夢』（*）を見てもわかる。ここから「喜劇の法則」を書くことができるのだが、それは別の機会にしよう。

(*) *A Midsummer Night's Dream* : Midsummerというのは六月二一日の「夏至」であって「真夏」ではないから、「真夏の夜の夢」というのは、誤訳である。